

鮮やかなヒオウギを配列して魅せる

たぐちきみのり
田口公則（学芸員）

仕事柄、貝化石を扱っていると、色よりも姿形に注目することが多くなります。化石では、その生物が持っていた色素が保存されることは希で、色の特定は難しいからです。モノクロの化石屋からすると、ヒオウギの美しい色には魅せられるものがあります。黄、橙、紅、褐、紫、等々、ヒオウギの貝殻には一体何色があるのでしょうか。本稿では、その色彩を見るワークショップ（体験型講座）のアイデアを紹介します。

ヒオウギを集める

ヒオウギは、西日本で養殖され食用となる二枚貝です。手軽に市場で調達できる点は教材向きです。じつは15年ほど前、色鮮やかな貝を期待し活ヒオウギを多数仕入れました。しかし、褐色の貝ばかり届き色比べには利用できませんでした。その後、養殖が盛んとなり、色鮮やかなヒオウギが広く流通するようになったのは近年のことです。

愛媛県愛南町から活ヒオウギを仕入れ（図1）、貝殻をならべてみました。色とりどりののが一目瞭然です（図2）。

ヒオウギの色を表現する

黄色といっても様々な黄色があります。色鮮やかなヒオウギの色をどのように記すことができるでしょう。

色の規定に標準としている色見本帳と



図1 愛南町から仕入れた活ヒオウギ。



図2 ヒオウギの貝殻をならべる。

ヒオウギの色を直接比べることが、色を記す確実な方法です。見た印象や写真でも記録もできますが、同じ色でも環境によって見え方が違ってきます。ですから、色見本と比べることが手軽で確実なのです。

似通った色の違いを連続に見るには、色相、明度、彩度という色の三属性を用います。この三属性を空間的に組み合わせたものが色立体と呼ばれるモデルで、全ての色が色立体のどこかに位置できます。色が座標で決まるとなれば、ヒオウギもそこに合わせればよいことになります。

ヒオウギを色立体に配置すると面白そうです。しかし空間に貝殻を据えるのは大変です。そこで平面的な配置を考えてみます。色を順序立てて円にした色相環というカラーチャートにヒオウギを配置するのです。適当な色相環を大きくプリントアウトしてヒオウギを置いてみました（図3）。じつは正確な色^{しきそうかん}の色相環をプリンターで印刷することは難しいのですが、大まかな色の傾向をつかむ用途での代用にはなります。これでヒオウギの色を平面に配置できるようになったわけです。

ワークショップ「貝を色々ならべよう」

色相環にヒオウギをならべる。この手法を用いて、ヒオウギの色を調べるワークショップを試行してみました。

参加者は、箱の中からヒオウギを一つ



図3 色相環にヒオウギを置いてみる。



図4 体験講座「貝を色々ならべよう」。

とりだし、色相環に貝を置いていきます（図4）。つぎつぎに貝が配置されていくことで、色とりどりといっても何色系が多いのかが見えてきます。

色見本アプリ（タブレット端末）を用いて、簡易的にヒオウギの色の数値を知ることができます（図5）。自分のヒオウギの色を数値で持ち帰ることができます。

さらには、絵の具を調合し、ヒオウギの色を作り出すことにもトライしました。難しいかと思われた色の調合、みなさんヒオウギと同じ色を作ることができたようです（図6）。紙片に自分が色を記すことでも、色の持ち帰りが可能となりました。

見えないものを見えるように

「見えないものを見えるようにする」とは可視化の本質ですが、理科での重要な要素です。すなわち、見えないものを洞察する活動です。今回、標本そのものを色配置することを試みました。これは、盲学校等でも活用できそうです。科学によって、いずれ「モノクロ化石」が色鮮やかに甦る日が来るかもしれません。

本実践では、真鶴町立遠藤貝類博物館および同館サポーターズの協力をいただきました。本活動の一部はJSPS 科研費 23501050 の助成を受けて行いました。記して深謝します。

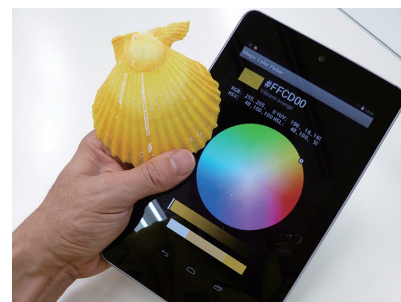


図5 色見本のアプリで色合わせ。



図6 絵の具の色を調合し、カラーハント。